

寒冷地形談話会通信

1997年度第5号 1997.11.11発行

事務局：〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学地理学教室寒冷地形談話会事務局

TEL. 0426-77-1111 (EXT. 3836) E-mail: aoyama@geog.metro-u.ac.jp

・12月例会のお知らせ

日時：1997年12月6日(土) 10時～

場所：明治大学駿河台校舎

JR中央線お茶の水駅下車徒歩5分

教室は「当日大学院棟の前に掲示します。

(大学院棟以外の教室になります)」

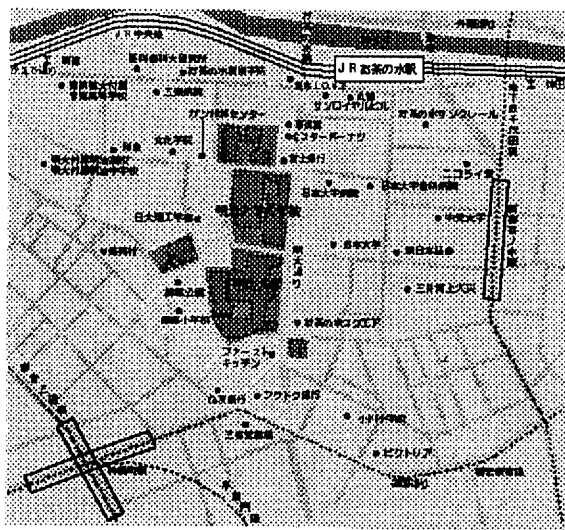
演者・演題

渡辺悌二

(北海道大学大学院地球環境科学研究科)

「ヒマラヤの最近の地形・地生態学研究」

発表の後、12月例会恒例のスライド大会、忘年会を予定しています。フィールドでの写真、海外旅行の報告等、スライドをお持ちになり、ご参加下さい。お待ちしております。



明治大学駿河台キャンパス案内図

(明治大Web Siteより)

・11月例会報告 (11月1日、於：お茶の水女子大学 参加者14名)

中新田育子(宮城大学)「中部山岳におけるハイマツ帯の維持機構と成帯構造」

植生帯には植物が持つ固有の生育温度による生育適正域が存在する。中部山岳のハイマツ帯はハイマツ一種からなる純林を形成しているため種間関係に規定されず、生育適正域を抽出するには適している。本発表では中部山岳においてハイマツの成長や繁殖について標高別に調査を行ったところ、ハイマツ帯は Care zone(標高 2900m 未満)と Ecotone(標高 2900m 以上)の二つの構造を持っているとの指摘がなされた。

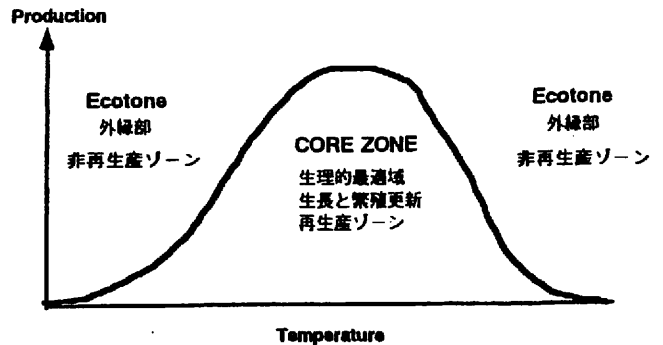
中部山岳(乗鞍岳、木曾駒ヶ岳、北岳)において標高 2500m から 100m 毎にハイマツの分布形態、生育形、生長量、球果生産と更新過程、林床植生について調査を行ったところ、ハイマツの成長や繁殖は 2900m から急激に落ち込むことが明らかになった。この結果からハイマツ帯は 2900m を境に下部と上部に分けられる。ハイマツ個体各部位(群落高、根元直径、幹長、年平均伸長量)のサイズや球果生産量に関して下部は上部の約 2 倍の大きさを示す。実生の定着に関して上部では定着後 20 年以上を経過している個体が少い。また、林床の植生に関して下部では亜高山帯と共

通する植生であるのに対し、上部では高山要素の植生が中心となる。

以上の結果からハイマツ帯は標高 2900m を境に下部が成長・繁殖が活発な Core zone、上部が移行帯的な性格を持つ Ecotone という 2 つのゾーンから成り立っていると考えられる。Core zone は生理的最適域であり、安定した生長と繁殖更新が行われ、再生産を継続して行うことができる。一方、Ecotone は生長、繁殖、更新の成功等植生帯を維持するために必要な機能を持つことができない非再生産ゾーンといえる。欧米の森林—ツンドラ移行帯ではクルムホルツ化した針葉樹の分布がみとめられるが、これらは単に生理的最適域をはずれたゾーンで樹形が変化しただけではなく、成長や繁殖の状態も変化していることが考えられる。

以上のことから、植生帯は大きく 2 つの生態的ゾーン、再生産ゾーンと非再生産ゾーンという構造を持っていると考えられる。植生帯をこの二つのゾーンに分けてみることは、植生帯の維持・再生機構を理解するためだけではなく、環境変化に伴う植生分布の変化過程を考える上で重要な視点になるものと思われる。

(文責：都立大・福井)



植生帯における成帯構造に関するモデル

・寒冷地形談話会北海道支部例会発表の申し込みについて

12 月 13 日 (土) に北大・地球環境科学研究科にて、北海道支部の例会を行います。昨年同様に、今年も発表を募集いたします。発表希望者は、11 月 28 日までに、以下のいずれかの宛先に申し込んでください。

メール: twata@ees.hokudai.ac.jp

ファックス: 011-706-2213

郵便: 060 札幌市北区北 10 条西 5 丁目 北大・地球環境科学研究科 渡辺 悌二

・2月例会について

2月例会は卒業論文、修士論文の発表大会を予定しています。今年卒業論文や修士論文を書かれる方は事務局までご連絡下さい(e-mailがベストです)。また、お近くに該当する方がいらっしゃいましたら、お知らせ下さい。事務局よりご案内いたします。

・前号の「夏の学校'97感想文」について

「この他にも寒冷地形ではありませんが、湧水を見つけて観察したりしました。」という部分について、「あれはモレーンのテイル露頭の湧水でした」とのコメントを五百沢先生より頂きました。鳥瞰図譜の68ページに説明がありますので御参照下さい。

参考文献：五百沢智也（1979）：鳥瞰図譜＝日本アルプスの地形誌 講談社，190P.

・1998年版カレンダー領布について

恒例の寒冷地形談話会ネーム入りカレンダー『大雪山の四季』を12月例会で領布いたします。一部¥1,000(税込)です。

なお、通販も可能です。下記の郵便振替で直接、お申し込み下さい。但し、送料(一部=¥270, 二部=¥390)を加算して下さい。

00140-5-666322 清水長正

この件に関しての問い合わせは03-5478-8324 清水まで

・会費納入のお願い

今年度の会費をまだ納入されていない方は、納入をお願いいたします。3年間未納の方は通信の発行を停止します。なお、会費は郵便局の振り込みでお願いします。未納年度は宛先ラベルの数字です。

寒冷地形談話会 00100-9-171342 1,500円/年です。

・山岳研究气象台

“山岳研究气象台”は山の研究に関する展望、評論、随筆などを、つれづれなるままに書いていただくコーナーです。

積雪期調査に思う

松本 穂高（北海道大・院）

私が学部生のとき、指導教官だったk先生と沢登りに行ったことがある。氷河地形があるのでないかと疑われている地域に、その証拠を見つけに行く目的が半分、単に遊びにという目的が半分であった。先生は50歳を過ぎており、ザイルを使うようなハードな山登りをするには、決して若いと言える年齢ではなかった。ところがいざ沢に入ってみると、先生の足取りは軽く、滝や急な草つき斜面のトラバースを難なく越えていった。かえって私の方が、先生のちょっとした動作から得ることが多かったのが実際である。聞けば、先生は学生時代に山岳部員として活躍し

ていたとのことであった。

またあるとき、地形学を志すメンバーが集まり、巡検で登山をしたことがある。初秋のころのこと、2000m ほどの山であった。登山中に天候が急変し、私たちは風雨にさらされることになった。メンバーの何人かは山登りがほとんど初めてであり、装備が貧弱だった。手袋や雨具すら持っていないことに、私は驚かざるを得なかった。登山の経験というのは、やはりいざというときに重要になってくるものだ実感した出来事であった。

聞くところによると、高山地域で調査する研究者の中には、登山技術の訓練の経験がほとんどないままに山に向かう人も見受けられるとのことである。無雪期だけの入山なら、それほど問題はないだろう。しかし積雪期の日本アルプスのように、きちんとした訓練を受けた人しか行くべきではない山域に、そのような訓練を受けていない研究者が安易に入山することは、どうかと思う。

最近では、冬季でも運行するリフトやロープウェーが山奥まで延びるようになった。それによって、厳冬期の日本アルプスでさえ、かなり身近な存在に感じられるようになった。しかし忘れていけないことは、どんなにアプローチが楽になろうともいったん山の中に入れば、山の環境の厳しさは昔から何も変わっていないということだ。冬山登山を経験している人なら知っているが、冬山では天候の急変によって山の表情がまったく変わる。熟達者でさえ、冷静な判断ができなくなったりするのだ。それに、もし天気がよかったとしても、積雪の斜面では常に雪崩の危険がつきまとう。ピッケルを用いた滑落停止技術や積雪の弱層テストの方法などは、最低限知っていないといけないことだ。

そこで私は思う。冬山登山に必要な知識・技術がほとんどない人が、積雪期の高山にのぞむことがあってはいけない。ましてピッケル、アイゼンの使い方さえ分からないなどと言っている人では、無謀と言うほかない。山での事故は、多くの人に迷惑をかけ、また膨大な費用がかかることを考慮するべきだ。そして積雪期の高山にのぞもうと思う人は、しっかりした知識と技術を習得した上で、危険地域に立ち入るという自覚を持って出かけてほしい。

自分のフィールドの積雪期の様子を見ることは、研究により深みが増すという点で賛成できる。今まで登山技術に対する訓練を受けたことがない人は、一度受けておけば、k 先生の例が示すようにその後の研究活動の可能性が大きく広がるということを視野に入れ、この際訓練を受けることをぜひ一考願いたい。

事務局より

「山岳气象台」のコーナーでは記事を募集しています。どしどしご投稿下さい。松本氏に対するご意見もOKです。